

十住毘婆沙論の教行證

藤谷大圓

先ず科文的に云えば、序品は造論の意趣、第二入初地品、第三地相品、第四淨地品の三品は證、（第五釋願品は後述）、第六發菩提心品、第七調伏心品、第八阿惟越致相品の三品は行、第九易行品に教が見られ、第十除業品より第廿五助念佛三昧品迄の十六品も行、最後の第廿六譬喻品と第廿七略行品の二品が證である。かく十住論は證、行、教、行、證の次第をもつて構成され、最初の證の自己展開たる十大願成就の筋道において次下の行、教、行、證がある。

順序として先ず所釋の十地品と對照すれば、十地品初の間答と、十住論の序品とは全く立場が相異している。次に第二品より第五品迄は、その所釋の文を明確に十地品に見るのであるが、第六品以下廿一品の對照は甚だ困難であり、殊に第六品より第十一品迄の六品は全く本經にその所釋の文を見ないのである。これ經にあつては、金剛藏菩薩が利智精進の菩薩に難解難入の地位そのものの相を説けるに對し、龍樹はかかる地行の成就は、慍傷すべき世間をして菩薩不退の位に入らしむるにあるをもつて、その世間の入不退位の道・方便を明かにせんとした（序論）からである。以下十住論における教行證の關係がこれを明かにするであらう。

そこで次に所釋の經になき諸品の關係を窺うと、初の第六品は、次前の釋願品が菩薩道と云うよりは寧ろ佛道を明すに對し、「衆生

初發菩提心」として全く初發心について述べ、以下の諸品すべてこれを承けついでいる。即ち、次の第七品はこの菩提心を失わざらん爲の調伏心を明し、これによつて修すべき行を明すが第八品、そしてこの行の實義を明すが第九易行品と見られる（これについては本誌第三號で既述）。次の除業品以下の行は、易行品に明す執持名號なる方便易行道の世俗的在り方であり、同時にそれは又、執持名號が入不退位の實義であることを反證すると考えられる。かくて慍傷すべき世間は、利智精進の菩薩と同證なる不退位を證得するのであると示す爲に、最後に至つて再び入初地、地相、淨地各品の偈を掲げ、十善十不善道を明していると思はれるのである。一言で云えば、第六品より第八品迄は第九品の易行道開顯の爲の筋道であり、易行品における執持名號の方便によつて自らそこに初地の行が行ぜられ勝義諦に悟入することとなるのであつて、ここに序品に述べられた論主の素意が遂げられた譯である。

果してそう云えるだらうか。先ず易行品と諸品との關係から見てゆきたい。易行品と第六、七、八品との關係は本誌第三號で述べた。次は第五品との關係である。第五品に明す十大願及び十究竟は、その前に明す「所入の階位」たる證が二乗の證でなく菩薩の證であり、無上涅槃に至らんが爲の發願であつて、従つてこの願の成就こそ菩薩地行の成就である。ところが、この願が次下の諸品には承けつがれず、易行品に承けつがれている。例えば、第七願の長行に「一切去來今佛威力功德智慧無量深法等無差別、但隨諸佛本願因緣、或有壽命無量、或見者即得必定、聞名者亦得必定」云々とあり、これが易行品に承けられて入不退の方便として聞名、稱名、見佛等と説かれている。しかも易行品には、佛の名號が出されると共に

「十方佛稱讃」とか、「十方現在佛 以三種因緣 歎彼佛功德」等の句が多くある。諸佛の讃嘆、それは先の願の成就を意味するものであつて、教である。即ち、釋願品の願が易行品に來つて教として成就した譯である。ところで、願が教となるにはそこに行がなくてはならない。そこで次前の第八品を見るに、そこには漸修の菩薩の行として廣く能所の空・無が説かれてゐる（既述の如くその實義は易行品の執持名號である）。そして阿惟越致相品と名づけたその阿惟越致相につきては唯だ「般若已廣説 阿惟越致相」としてゐる。しかも漸修の菩薩行を明すところでは、「如是實義者 終不可得^レ説」とか、「言説則有^レ過」等と述べながら、今の偈の下の方行には、「阿惟越致有所言説 皆有^レ利益」と説き、そして菩薩は如何なる惡魔の障礙あるも遂に動することなく、十善道を捨てず十不善道を行ぜず「身口意業所^レ種善根皆爲^レ安樂 度^レ脫衆生、所得果報與^レ衆生」等としてゐる。これ、阿惟越致相は、空亦復空として限りなく世間・有の上に般若波羅蜜なる空の用（*upaya* *gāhavarjāna*）を行じ、以て世俗をして世俗諦（*sarva*）たらしめるにあることを示すに他ならない。かくてこの第八品の終に、先の十大願の行が説かれ、同時に、この「阿惟越致有所言説 皆有^レ利益」の意義が易行品の名號とか諸佛讃嘆で示されていると考えられる。

以上の如くして、證の自己展開なる願行は遂に能所相對なる言教として相對世間の上に施設（*pratipatti*）せられたのであるが、これを慍傷すべき世間の立場より云えば、世間をして、憶想分別し能所相對する戲論の網に入らしむるに最も功能ある言説が、今や佛の教と置き換えられることによつて、世間は恭敬の心に執持せしめられ、信心清淨ならしめられる、即ち、我我所のを見を捨離して能所空・無

十住毘婆沙論の教行證（藤 谷）

ならしめられるのである。この能所空・無なる易行道の世間的在り方が次の除業品以下に明される懺悔、勸請、隨喜、廻向の行であつて、それは世間と佛とが不二異なる關係に置かれた世俗諦（*sarva*）である（既述）、かくて遂に勝義諦に至るのである（最後の二品）。この筋道を、更に先の十大願より眺めるならば、慍傷すべき世間が、教↓行↓證への趣入は、そのまま、所入の階位たる證の自己完成の爲の願行成就に他ならない。ここに、その初において全く立場の異つたこの論が、能く佛華嚴經十地品の註釋である義が知られる。

なお、第十除業品の初に「問曰……更有餘方便耶、答曰……非但憶念稱名禮敬而已、復應……」とあり、而も以下懺悔等の行を説くに多くの品を以て甚だ詳細である。これにつきては、緣起の有自性的理解、從つて空の概念化を極めて憂い、それ故に般若波羅蜜を強調した龍樹であることを考えるならば、容易に肯かれるであらう。蓋し、信より行が生起すると云つても、それは轉變説的な生起であつてはならない。信なき行は單なる行動であると同時に、行なき信は概念に過ぎない。

1 本誌第三號に第八品と第九品のみが、經にその所釋の本を見出せないと述べたは誤。